

ウクライナ大統領の訪問

中村 純

発端は、外務省からの一つのメールであった。通常、読者や一般の方からの質問や連絡を受け付けているミツバチ科学研究施設の代表アドレスに、2005年6月23日に「見学のお願い」というタイトルのメールが飛び込んできた。よく見ると、括弧付きでウクライナ大統領の文字、そして外務省と書かれてあった。文面に目を通すと、日本の国連安保理事国入り支持の表明を

主目的として来日するウクライナ大統領が、日本のミツバチを見学したがっているのので、対応の可否を知らせて欲しいとのことであった。

ウクライナのヴィクトール・ユーシチェンコ大統領は、2004年11月の大統領選野党側候補として立候補したものの落選した。しかし、投票結果に与党側の不正があったことに疑念を投げかけ、12月の再投票の結果、最終的に選出された大統領である。ロシアとの関係重視をとる与党側に対して、ヨーロッパやアメリカとの連携を訴え、シンボルカラーとなったオレンジ色のリボンを腕につけて、民主化を追い風に運動をしたことから、一連の運動がオレンジ革命と呼ばれた。支持者が過激な行動をとらず、デモの警備をする警官隊の盾などに飾り付けられた花など、印象的なシーンが日本でもよく報道されていた。その後、いくつかの紆余曲折を



図1 大統領とニホンミツバチとの対面。左上) 対馬タイプの蜂洞にカメラを向ける。左下) 伝統的な重箱式巣箱の構造を確かめる。右上) 内蓋についたミツバチが軽くたたくと一列に巣の中に入る様を見て「よくしつげができています!」、右下) カメラか手か質問かが飛び出す。AY巣箱で飼われているニホンミツバチからはなかなか離れられない。



図2 左上) ニホンミツバチの観察巣箱で女王蜂を探す大統領。左下) オオスズメバチの巣をカメラに納める。右) オオスズメバチに熱殺で対抗するニホンミツバチの大きさをポスターで実感。

経て、この記事が書かれている現在では政権政党としては厳しい状況に置かれているが、そうした点も日本国内でよく報道され、日本での知名度の高い大統領の一人でもある。

ところが、当のご本人が、ミツバチを300群以上飼育している養蜂家（その程度ではウクライナでは趣味の域だということであるが）で、ウクライナ養蜂協会の副会長を務めているとい

う点はまったく知るよしもなかった。大統領の訪問という事態を受けて、大統領の公式ホームページを覗いてみたところ、趣味の欄のトップには絵画、そして2番目には養蜂が、面布もかぶらず蜂の世話をしている大統領の写真付きで紹介されている（<http://www.yuschenko.com.ua/eng/Private/Hobbies/>）。そのミツバチ大好き大統領が来るというのである。

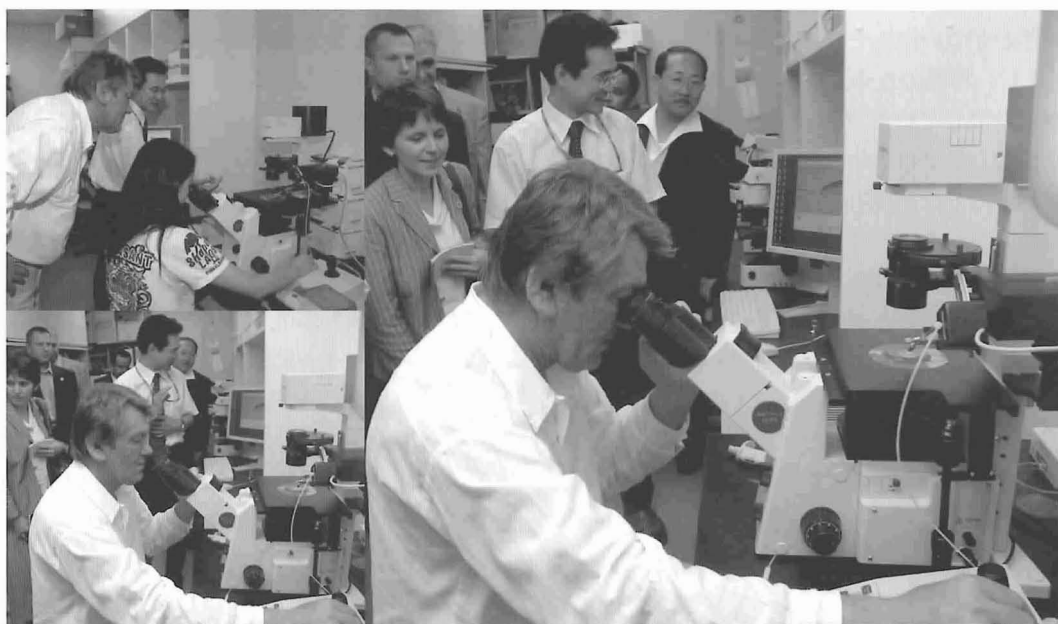


図3 遺伝子解析実験室でミツバチの卵への遺伝子導入実験を見学。左上) 学生の作業をのぞき込む。左下) やはりご自身で挑戦したくなる。右) 学長も見守る中、見事に注入に成功。



図4 左) 玉川来訪のお土産にミツバチ関係の書籍や、例年になくよく採れた玉川大学産ニセアカシア蜜をプレゼント。右) 来訪の記念写真 (大統領の向かって左隣が小原学長)。

7月20日当日、予定よりやや遅れての到着となった大統領を迎えたのは、小原玉川大学学長夫妻と芸術学部の和太鼓の演奏。蜂場で待機している私たちにもこの音が聞こえ、いよいよ大統領が来るという緊張感が高まる。路上で一列に迎えるつもりが、車を降りた大統領は通訳だけを連れてすたすた蜂場へ、こちらが後を追いかける羽目になった。

やはりニホンミツバチが最大のお目当てだったのか、すでに薄暗くなり始めた蜂場では、長時間にわたって、吉田教授の説明を聞きながら巣箱の内検。写真がお好きとのことで、カメラか手かがつい出る一方、次々と質問も飛び出す(図1)。準備のため2度にわたって玉川大学を事前訪問していたコステンコ大使の心配通り、なかなかミツバチから離れられない。ニホンミツバチの分蜂捕獲用の「傘」を見るために斜面を駆け下りる想定外の行動で、警備陣をはっとさせる場面もあった。ついで、昆虫飼育室棟でニホンミツバチの観察巣箱を覗いたり、小野教授から小さなニホンミツバチが熱を使ってスズメバチに対抗する説明を受けて感心。この巣はお土産にお持ち帰りいただいた(図2)。

さらに場所を変えて遺伝子解析実験室へ(図3)。これは、好きだからミツバチを見るというだけでなく、日本でのミツバチ研究や科学技術という場面も大統領に学んで欲しいというコステンコ大使の強い要請があって、今回の見学先に加えられた。全般的な説明のあと、ミツバ

チの卵への遺伝子導入実験を見学。佐々木哲彦助教授から「実際にやってみますか」と誘われるまでもなく、学生を押しつけて顕微鏡を覗き、マイクロインジェクションに挑戦。注入確認用の色素が卵の中に拡散していき、初めての挑戦で成功。一連の研究の意義などをお伝えし、ミツバチ関連の見学は無事終了した。その後、学長とも短時間ながら懇談をもち(図4)、予定よりも長い時間を玉川で過ごしていただくことができた。

日本での最初の訪問先が玉川大学であったことは大変光栄であったが、愛知県で開催中の万博を訪れた際、名古屋市の養蜂研究所の井上さんをお訪ねになった。このときはご夫人もご同伴で、その点はうらやましいことであった。

大統領の顔面には、ダイオキシンによる暗殺騒動のときの痘瘡が残り、表情が出にくいようであった。そうした政治的な混乱の中の大統領が、ミツバチが大好きで、そのことに関しては一分の疑いも挟む余地がないことは今回の来訪を通じて実感でき、「ミツバチを愛する人には悪い人はいない」という言葉を信じたくなった。

大統領の来訪後、やはりウクライナ関係のニュースにはつい注目してしまう。ミツバチの社会が人類の社会の規範になるかどうかはわからないが、そんなミツバチ大好き大統領が治める国の安定と平和を願わずにはいられない。

(〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1)

玉川大学ミツバチ科学研究施設)